

東晋元帝の勸進の新研究

大久保秀造

はじめに

永嘉五年（三一）六月、洛陽が陥落し多くの宗室大臣が殺され、孝懷帝（懷帝）が劉聰により平陽に連行された。建興元年（三一三）四月、孝懷帝が弑されたことを聞き孝愍帝が即位、長安にて軍務・政務を執るも、四年（三一六）十一月に長安が陥落、先帝と同じく平陽へ連行された。そして五年（三一七）十二月、孝愍帝が弑された、ここに西晋は滅亡することとなったわけであるが、この滅亡は実に大きな意味を持つ。異民族による王朝滅亡という事実がそれであり、如何に国家が内憂で弱体化していたとはいえ、当時の漢族に与えた衝撃は計り知れないものであったことは想像に難くない。今回取り扱う東晋元帝の勸進はこの直後のことである。帝位への勸進、すなわち多くの人々から皇帝推戴されることであるが、彼が如何に皇帝即位へ歩んでいったのかを彼が江南に渡った永嘉元年（三〇七）年から順に追っていき、その最中に何が起きていたのか、どのようなプロセスを重ねているかを明らかにしたい。また東晋成立後の漢族・周辺勢力の動向についても押さえてみる。

一 司馬睿と周辺の人々について

東晋元帝・司馬睿は洛陽出身で宣帝の曾孫にあたり、『晋書』によれば立派で異常な体つきの有能な人物で、十五歳で琅邪王に封ぜられ、惠帝時代は大人しく過ごしていたので災禍を免れた。その人物を見抜いていたのは嵇紹だけであったという。この司馬睿であるが『魏書』での紹介は驚く記述となっている。

僭晋司馬叡、字景文、晋将牛金子也。初置宣帝生大將軍、琅邪武王佃、佃生亢從僕射、

東晋元帝の勸進の新研究

琅邪恭王覲。覲妃譙國夏侯氏、字銅環、與金姦通、遂生叡、因冒姓司馬、仍為覲子。牛金の子で司馬氏ではないとされている。多くの先学は取り上げるまでもないこととしているが、これが今日まで伝えられてきた背景を無視することはできない。司馬睿を貶めることによつて如何な利益があるのかを考慮すれば、背景がみえてくる。司馬氏は多くの一門がおり、彼は八王の乱当初は目立たないようにしており、封国に近い東海王の与党して活動し永嘉の初めに江南へ向かう。その司馬睿を支えた周辺の人々は以下の面々である。

永嘉初、用王導計、始鎮建鄴、以顧榮為軍司馬、賀循為參佐、王敦、王導、周顛、刁協並為腹心股肱、賓禮名賢、存問風俗、江東歸心焉。

王導、王敦は琅邪の名族王氏、周顛は安東將軍周浚の息子で名望家、刁協は河北の豪族で法律に詳しく、顧榮と賀循は江南の名族代表である。彼らを招聘・徴用した時期は江南赴任初期（安東將軍府）・江南地域全権委任期（鎮東將軍府、開府儀同三司）で皇帝即位を為すまでの基盤構築に尽くした。ここで各人に少し説明を入れておく。王導は若い頃から睿と親しく、中央が混乱すると睿に江南に鎮するように勧めた。江南に鎮すると南人の名士を積極的に招聘し、北来の人々が来ると、それを慰撫することを忘れなかった。南人と北人の調和に取り組み、江南の地に中央の洗練された文化や政治を根付かせる努力を惜しまなかった。軍事と政務の両方で司馬睿を支え、東晋成立後も長く国政を輔弼した。彼の業績は目覚ましいとされる。

導阿衡三世、經論夷險、政務寬恕、事從簡易、故垂遺愛之誉也

王敦は後に司馬睿側近の劉隗・刁協らと反目し創建間もない東晋を危機に陥れたものの、東晋と皇帝に対して反意は無かったと考えられ、東晋成立まで軍事方面で活躍する。周顛は東海王のもとで幕僚を務めたが、その死後江南へ赴き重用され、後に王

敦が乱を起こした際、侮辱したとして王敦によって殺された。刁協も洛陽陥落後に江南へ渡り軍諮祭酒となり、鎮東長史に出世した。後に劉隗と法律の厳格化を進め、貴族の怠慢を厳しく取り締まったので王敦と対立、王敦の乱を招き逃亡中に部下に殺された。顧榮は呉の四姓の一つという名族で、一族は孫呉時代から高官を輩出した。彼自身も郷論で高い評価を受け都へ招聘されたほどの人物である。彼と同期で入洛した者に陸機兄弟がいる。中央の政治闘争に絡んで嫌気がさし帰郷、直後に陳敏の乱に遭う。始めは陳敏に力添えするも、陳敏の無策に失望し他の豪族達に呼びかけて陳敏を討つ。再び中央から招聘され洛陽へ向かうも、混乱を聞き故郷に戻る。その後建康に鎮した司馬睿より軍司として招聘され、多くの江南の人士を司馬睿陣営に参画させるも永嘉六年（三二二）に死去する。賀循は会稽出身の豪族で孫呉時代から活躍してきた武將の家柄であり、彼自身才覚に優れていたので陸機の推挙により中央に召された。乱れた中央から身を引き石氷や陳敏の反乱を鎮定した。司馬睿が江南に鎮すると軍諮祭酒・参軍に任命される。顧榮没後に軍司に任命されるも固辞、それからしばらくは沙汰を受けても昇官せず節義を守った。ここまで司馬睿という人物と東晋成立まで司馬睿のもとで力を尽くした主要人物たちをみてきた。では次に司馬睿の江南赴任から皇帝即位までの様子をみていくこととする。

二 江南への赴任から皇帝即位まで

この時期の司馬睿とその配下集団についての研究は越智重明氏、矢野主税氏、川勝義雄氏らを始めとして多いため参考となる。¹⁾永嘉元年七月、司馬睿は東海王から安東將軍・都督揚州諸軍事に任命されたことと、王導・王曠（王羲之の父）らの議を受けて建業（建康）に鎮することになる。その直前にはこの一帯で政情不安からなる反乱が相次ぎ、鎮圧されたばかりで、国内の治安は悪化の一途を辿っていた。『晋書』王導伝は次のように記す。

及徒鎮建康、呉人不附、居月餘、士庶莫有至者、導患之。

「司馬睿が建業に至ってしばらく、江南の名族士庶は集まらない状況であった」という。そこで江南の名族代表たる顧榮や賀循といった面々を前項にみた史料のように軍司や軍諮祭酒、参軍という軍府の高官として積極招致を行い、彼らの江南での影響に期待したと考えられる。江南へ渡って数年、その地に勢力を築くべく在地豪族の

招聘、軍府軍備の整備、南渡してくる北来の士庶との融和を進めたことは想像に難くない、招聘に関しては軍府の高官ではないものの在地豪族の周氏ら武將として活躍、軍府の整備については同じく揚州諸軍事として江北に鎮していた周馥が東海王と対立、越は琅邪王睿に討伐を命じ、彼はこれを滅ぼし揚州の軍事権を掌握している。南渡してきた北来の人々と在地の人々との融和という点では、在地の名族である顧榮・賀循を始めとする人々を高官に用いることで王の側近集団との釣り合いをとっている。永嘉五年五月、孝懷帝より鎮東大將軍・開府儀同三司・督揚江湘交廣五州諸軍事に任命され、この方面の宗室の重鎮としての役割を期待されていたことだろう。また軍事権だけでなく開府儀同三司を加えられていることから政務も担うことになったと考えられる。この一月後に洛陽が陥落し多くの宗室大臣が殺され皇帝が連れ去られる。実はこの年の三月、石勒討伐へ出征していた東海王越が死去、その軍団が壊滅しているのだ。実力者であった東海王の軍勢は洛陽防衛の要であり、彼を喪ったその軍団と与党の多くが壊滅したことは即ち防備力の弱体化そのものである。それは西晋の終焉を決定するほどの大きな出来事であった。孝懷帝が平陽に連行された時、司空の荀藩らが天下に檄を飛ばし司馬睿を盟主として皇帝奪還と国家の復興を図ろうとしている旨が『晋書』元帝紀にみえる。

及懷帝蒙塵于平陽、司空荀藩等移檄天下、推帝為盟主。

これに対し一部の者は従わず討伐されている。国家が一致団結して外敵に立ち向かう際に結束を乱す者は容赦なく処断される、これは古今変わらない。この時期に外敵に対抗しうる軍事力を有し、旗印とできる人物が司馬睿であったことは王導の江南経略がある程度成功していたからである。さて東海王の死や洛陽陥落によって華北の人士の多くが江南にいた司馬睿陣営のもとへやってくる。『晋書』王導伝に記述がある。

俄而洛京傾覆、中州士女避乱江左者十六七、導勸帝取其賢人君子、與之圖事。

王導は北来の人士を採用するように献言している。それは南人と北人の調和を図り、中央で官吏として活躍してきた人々を集めて陣営の強化につなげる狙いがあると考えられる。

魏・西晋時代には貴族サロンが中央で花開き、郷論によって家柄や人物評価がなされてきた。²⁾川勝氏らによれば、これは貴族社会において必要なもので高度な知識や教養が備わった人物らが政界を支配していたことが解り、王導の従兄弟である王衍はその中心人物であったという。この王衍なる人物は大尉にまでなったが、東海王の与党

で軍団が壊滅させられた折に捕えられ、石勒により殺されている。この郷論により家格・人物評価を加味して品官が与えられていた。かつて魏帝国が成立した時に陳羣によつて建議され採用された「九品官人法」で定められたものだ。当初は有効に機能したと思われるが、時代が下がるにつれてこれによつて就くことのできる職掌が決定され家格・品格が貴族層の間で永続的になり、政治が倦んで乱れていく遠因となる。才覚ある人物が上位の官品に就けるのであれば問題はないが、それが欠如した人物が就けば政治行政は機能不全に陥る危険性を孕んでいるのだ。また自身の定められた官品を超えての職務に就くことは不可能であった。郷論が発達し高位の官品が定まった北来の人々と郷論が未だ盛んではない南方人士の格差は歴然としており、南方人士の官品が中央では低く評価されていたという（ただし陸機などの江南でも中央に知られた名族の評価は高かった）。故に北来の人々が増えていくことは、職官面で南方人士が少なくなるこの要因といえよう。事実矢野氏や金氏の表から鎮東大將軍府になつてからの北来人士の増加は顕著である。このような状況になれば南方人士で不平不満を持つ者が現れる。折しも永嘉六年に南方人士のまとめ役を務めていた顧榮が亡くなる。翌年には義興の周氏の長であつた周玘が悶死した、その遺言により息子の璉は孫弼なる人物と謀反するが、叔父である周札などの一族は協力せず、王導に見抜かれて周氏と並び称された在地豪族の呉興の沈氏らの討伐を受けて鎮圧されている。

建興元年（三一三）四月、孝懷帝が殺されたとの報告があり、長安で孝愍帝が即位した。五月に司馬睿は左丞相・大都督中外諸軍事となる。江南にあつて長安を守れないため、司馬睿は甲冑をまとい四方を督戦、天下の兵を率いて外敵と戦つた。そんな時に吉兆が現れた。『晋書』元帝紀には次のようにある。

于時有玉册見於臨安、白玉麒麟神靈出於江寧、其文曰「長寿萬年」、日有重暈、皆以為中興之象焉。

司馬睿が晋朝を中興する証と噂される。建興五年・建武元年（三一七）に平東將軍の宋哲が孝愍帝の詔を伝える。前年の建興四年（三一六）十一月に長安が陥落し翌月孝愍帝は平陽へ連行されてしまう。ここから東晋元帝への勸進の始まりである。建武元年三月、まずは丞相府の群臣が尊号を名乗るよう上申する。

西陽王羨及羣僚參佐、州征牧守等上尊號、帝不許。羨等以死固請、至於再三。これに対し司馬睿は涙しながら「自分は罪深く、節義を守つて天下の恥を雪ぐためにいるのだ。君たちは何故そのように帝號を迫るか」といい、奴婢に車を用意させ本

国へ帰還しようとする。ために群臣は魏晋の故事に則るよう進言し、司馬睿はこれを採用した。

辛卯、即王位、大赦、改元。其殺祖父母、父母、及劉聰、石勒、不從此令。諸參軍拜奉車都尉、掾屬駙馬都尉。辟掾屬百餘人、時人謂之「百六掾」。乃備百官、立宗廟社稷於建康。

琅邪王から晋王となつた。丙辰に王太子を建て、西陽王羨・王敦・王導・刁協の官職を進め、琅邪王にも後継を建てている。そして同年六月、ついに丞相府外の諸將・諸侯・官吏を含む百八十名からの上申、つまり勸進がなされるのである。この勸進に名を連ねたのは、司空、并州刺史、廣武侯劉琨、幽州刺史、左賢王、渤海公段匹磾、領護烏丸校尉、鎮北將軍劉翰、單于、廣寧公段辰、遼西公段眷、冀州刺史、祝阿子邵續、青州刺史、廣饒侯曹疑、兗州刺史、定襄侯劉演、東夷校尉崔恣、鮮卑大都督慕容廆である。劉琨は宗室に連なる人物で、并州・幽州を中心に劉聰や石勒と戦つた。劉翰・曹疑・劉演・崔恣は華北で抵抗を続ける漢族官僚、段匹磾・段辰・段春は鮮卑段部の大人（領袖）、慕容廆は鮮卑慕容部の大人である。鮮卑とは中国東北部から北部一帯に移動居住し、かつては中国北部を略奪したりしていた民族で、この頃は他の民族からの圧迫などで弱体化し部族ごとに行動していた。なかでも段部と慕容部はこの頃有力部族であつた。そうした漢族外民族の有力者と漢族の華北有力者が揃つて上申した内容要点をみていく。一つ目の理由である。

臣聞天生蒸民、樹之以君、所以對越天地、司牧黎元。聖帝明王監其若此、知天地不可以乏饗、故屈其身以奉之；知蒸黎不可以無主、故不得已而臨之。社稷時難、則戚藩定其傾；郊廟或替、則宗哲纂其祀。是以弘振遐風、式固萬世、三五以降、靡不由之。

「天が民衆を生み、君主を建てさせるのは、天地を祀り民を治めさせるためです。聖帝たちはこの道理を知り、天地を祀ることを怠りませんでした。民は君主不在が天地を疎かにすることであることから、君主を望んでいます。社稷が困難に遭えば宗室諸臣が正し、祭祀が廢れると宗室の賢人が継ぐのです。それにより徳が広がり、規範は万世に定まります。ゆえに三皇五帝はそうしてきたのです」つまり天子・皇帝の不在は良いことではなく、天や民はそれを知っている。困難に遭えば宗室と臣下がこれを助け、祭祀者がいなくなるならば、その祭祀を継ぐのは宗室臣下の賢人の役割であるとし、伝説の聖王もそれに従つたと力説している。この後の部分は晋の歴代皇帝の

遺徳、今日の状況を記し、悲しいことだと嘆いている。次いで二つ目の理由である。

臣聞昏明迭用、否泰相濟、天命無改、曆數有歸。或多難以固邦國、或殷憂以啓聖明。(中略)伏惟陛下、玄德通于神明、聖姿合于兩儀、應命世之期、紹千載之運。符瑞之表、天人有徵；中興之兆、圖讖垂典。(中略)冠帶之倫、要荒之衆、不謀同辭者、動以萬計。是以臣等敢考天地之心、因函夏之趣、昧死上尊號。

「明暗は代わる代わるで、運は通じたり通じなかつたりし、天命が変わらないなら、道理や巡り合わせは国家に帰する。多難に遭つて国定まることもあり、深い憂いは聡明の証でもあります。……恐れながら陛下は、その徳が神靈に通じ、容姿は素晴らしく重要な時期に千載一遇の機会を得ております。瑞兆も天や民に見られ、中興の兆しは典籍にも明らかです。……朝廷の臣下や辺境の者たちが相談もなしに陛下を推戴したいとの意見が同じものが方に及びます。私たちは天地の心を推し量り、畏れ多くも陛下に尊号を称していただきたい旨をここに上申する次第です。」国家の運は未だ変わつていない、国難は国を團結させ、その憂いは聡明さの裏返しである。司馬睿は立派な人物であるから今こそ立ち上がる時である。瑞兆は天や民に満ちており、これは古籍に表れているものと同じだ、私たちは相談していないのに、あなたを推戴したいと願っている。どうか帝号を名乗られてくださいという内容である。一つ目の理由と連動してみれば、国家の重大事、しかし国運は未だ司馬氏にある、その中でもあなたは有力者だ、祭祀を継ぐに相応しい、朝廷の臣下や辺境の有力者まであなたを主として推戴したいという、これを受けるべきではないか、ということが理解できよう。社稷を安んじ祭祀を司り、晋の中興を為しえるべきとの意見が現れた箇所である。三つ目の理由が最後にくる。

臣聞尊位不可久虚、萬機不可久曠。虚之一日、則尊位以殆；曠之浹辰、則萬機以亂。方今踵百王之季、當陽九之會、狡寇窺窬、伺國瑕隙、黎元波蕩、無所繫心、安可廢而不恤哉？陛下雖欲逡巡、其若宗廟何？其若百姓何？……(中略)……陛下明並日月、無幽不燭、深謀遠猷、出自胸懷。不勝犬馬憂國之情、遲睹人神開泰之路、是以陳其乃誠、布之執事。臣等忝于方任、久在遐外、不得陪列闕庭、與睹盛禮、踊躍之懷、南望罔極。

「天子の位は長く空けるべきではなく、一日でも危ういの十日も空ければ政治が乱れる。今王朝は災禍の危機にあり、蛮夷によって国の隙を狙われ、民は揺れ動き心を繋げないでいる。どうして廢れてまで哀れみをかけないでいられようか、陛下は惱

み躊躇なさいますが、それは宗廟や民のためになりましようか？ ……陛下は日月の

ように明るく、照らさないところがありません、深慮遠謀はその胸の内から絆されて出てまいります。我らは犬馬に勝らないながらも国を憂い、皆が安心して暮らせることを願います。ために本心を綴り有力な家臣に託しました。私等は地方に赴任しているの朝廷に臨席は叶いませんが、盛大なる朝廷を喜びの糧としたく、はるか南を望んでおります」天子の位すなわち皇帝位を長らく空けることは国家が乱れる。宗廟・社稷・民のことを思うのであれば、逡巡せず帝位にあるべきだ。我ら地方の有力者や辺境の有力者、朝廷の臣下の言を速やかに受け入れてほしいとの見解が見受けられる。これらに対し司馬睿は情け深く答えたという。未だ平陽に孝愍帝があることを思つてのことだと考えられる。実は孝懷帝・孝愍帝は平陽に連行された際に帝位を剥奪され諸侯とされていたが、晋の宗室朝臣はそれを認めず、あくまで現皇帝の死去まで次代皇帝を建てないという節義を守つたのだと考えられる。それによつて徳行を積むことにもなつたであろうから、いくら勸進されても、内心その気であっても帝位を求めなかつたと考える。太興元年(三一八)三月、孝愍帝が平陽で弑され、百官からの上申を受け、ついに司馬睿は帝位に就くことを決意した。

「孤以不徳、當厄運之極、臣節未立、匡救未舉、夙夜所以忘寢食也。今宗廟廢絶、億兆無係、群官庶尹、咸勉之以大政、亦何敢辭、輒敬從所執。」是日、即皇帝位。「私は不徳、災厄の極にて未だ節義を立てず、奉ぜられて助けてもいない。寢食を忘れてしまうほどに。宗廟祭祀は断たれ、民は数限りなく、官吏や諸侯が、皆正しく政務にあるうとしてゐるのに、私が何をすべきかは、推戴された以上これに従うのみである」として即日皇帝位に就いたのである。ここに勸進によつて東晋が成立することになつたのである。

三 東晋に対する漢族・周辺勢力の動向

東晋成立後も華北に残つた漢族は東晋を如何にみていたのか。岡崎氏・川勝氏・川本氏らの指摘を参考におさえ考察する⁴⁾。北魏の道武帝の祖父・拓跋什翼犍(昭成帝)の時代に燕鳳という人物がいた。『魏書』の燕鳳の伝に以下の様な記述がある。

燕鳳、字子章、代人也。(中略)昭成素聞其名、使人以禮迎致之。鳳不應聘。乃命諸軍圍代城、謂城人曰：「燕鳳不來、吾將屠汝。」代人懼、送鳳。

燕鳳は高名な人物であつたらしく、什翼犍は自身の配下となるように招いたが断られた。什翼犍は燕鳳のいる城を包围し、「燕鳳が（自身のもとへ）来なければ、汝等を殺す」と。城の人々は恐ろしくなり、燕鳳を送り出したのである。彼は仕官後、重要な国事に携わり厚遇されているが、彼一人を仕官させるために軍を出勤させるとは凄まじい話である。燕鳳が招聘を拒んだ理由は記述がないが、川本氏は「漢族は胡族に仕官することを嫌っていた、できることなら東晋に仕官することを願っていた」としている。仕官拒否イコール東晋仕官願望とするのには疑問符もあるが一つの見方として挙げられる。力づくで自分の言い分を相手にきかせようという漢族から見れば「野蛮」行為が、また格下扱いしてきた民族に仕官を求められることが漢族を異民族政権に仕官しないとさせるに十分な理由を与えている。もう一つ例を挙げる、『魏書』の崔玄伯の伝に次のようにある

崔玄伯、清河東武城人也、名犯高祖廟諱、魏司空林六世孫也。（中略）太祖征慕容寶、次於常山、玄伯棄郡、東走海濱。太祖素聞其名、遣騎追求、執送於軍門、（下略）

崔宏は道武帝が慕容寶討伐のため常山にやってきたので自分の故郷を棄て東の海岸へ逃走した。道武帝はその名を聞いていたので騎兵を遣わして探させ、見つけ出して自身の配下としたというのである。先にあげた燕鳳の例と似通った形である。崔宏もまた著名であり優れた人物であつた。祖先は司空の官職にあつた家である。崔宏が逃げ出した理由も記載はない、川本氏は「東晋へ逃れるため海岸へ向かつた」との見解である。仕官後の崔宏も国家の機要・制度の草創に携り厚遇され、道武帝から事あるごとに相談され、国号論議に筋道を説き活躍している。両者とも強制仕官で厚遇されているが、ここでみたように漢族は仕官を控える態度を示している。川本氏らは「このころの漢族士大夫は、西晋滅亡の後には江南政権の門前に馬を繋ぐことを望んだ」と指摘する。それについては司馬睿が近臣と江南に逃れ、江南の有力者らの支援で東晋を建国したこと、華北からの移民（避難）が増えていったことから解る。また川本氏は「ただし全ての士大夫が東晋を認めただけではなかつた」ともいう。それは『晋書』の張軌伝に連なる子の張寔伝に記述がみられる。

是歳、元帝即位于建鄴、改年太興、寔猶稱建興六年、不從中興之所改也。

東晋が建国されて改元がなされたが、張寔は西晋の年号のままとしたという事例である。この漢人が西晋を継承する東晋に従わないという事例は、漢族全てが江南政権に所属することを望んでいなかったとする一つの見方であろう。また張玄靚伝に記述

がみえる。

有隴西人李儼、誅大姓彭姚、自立於隴右、奉中興年號、百姓悅之。

李儼なる人物が東晋の年号を奉じ、民がそれを悦んだとある。これらの記述からは、東晋を支持する人々と西晋を支持する人々がいたことを示し、東晋が西晋を継承している・していないと考える漢族がいたことを物語る。ただし時間軸のずれを考慮にされる必要がある。張寔の事例と李儼の事例は数十年の開きがあるので、情勢変化に注意を払わなければならない。華北に残った漢族には、強制仕官によって（中には自主的に）華北に出現した各政権に仕官するもの、江南へ移民（避難）していくもの、自身で徒党を組むなどして自立し西晋を奉じるもあれば東晋を奉じるもありという立場をとるもの、という三様に分かれていたと考えられる。

では東晋に対して周辺勢力はどのように考えていたのか。幾つかの例を取り上げてみる。まずは『晋書』記載の姚弋仲伝である。

弋仲有子四十二人、常戒諸子曰：「（中略）自古以來未有戎狄作天子者。我死、汝便歸晋、當竭盡臣節、無為不義之事。」乃遣使請降。

姚弋仲は「漢族以外が皇帝になったことはない。自分が死んだら（東）晋の臣下となつて働き、不義をしてはいけない」と戒め、亡くなる直前に自ら東晋に帰属している。劉琨が石勒に送った文言にも同様の表現がある。

遣勒書曰「（中略）自古以來誠無戎人而為帝王者、至於名臣建功業者、則有之矣。」「古よりこのかた、異民族で帝位に就けた者はいない。しかし名臣や勲功をたてた者はいると晋への随身を勧めている。弋仲の行動はこれを踏襲していると思われる。東晋は様々な政権に使者を送り、時には爵位を与えたりして修好し、時には武力を用いて併呑するという政策をとっている。蜀に建国された賈人（巴蜀の現地人）の成漢の李雄の言も同様である。

雄以中原喪亂、乃頻遣使朝貢、與晉穆帝分天下。（中略）曰：「我乃祖乃父亦是晉臣、往與六郡避難此地、為同盟所推、遂有今日。琅邪若能中興大晉於中夏、亦當率衆輔之。」淳還、通表京師、天子嘉之。

李雄は「私の祖父も父も西晋の臣下であつた。東晋の琅邪王が大晋を中夏に復興させようとするならば、私は衆を率いてこれを助けるだろう」と言い、東晋を容認し、配下として戦うことを示唆している。時代は下るが前秦の朝廷内での発言にもみえる堅引群臣会議、曰（中略）太子左衛率石越對曰「（中略）且晋中宗、藩王耳、夷

夏之情、咸共推之、遺愛猶在於人。

「晋の中宗は藩王に過ぎない、しかし夷夏の情が皆ともに彼を推すのは、すでに滅んだ西晋の遺愛がいまだに存在しているからである」という記録がある。これらを見る限り周辺勢力は東晋を西晋の継承王朝であるとみていることが判る。東晋と自分たちは対等であるという認識もみられ、『晋書』載記の劉元海（劉淵）伝にある。

元海曰；「善。當為崇岡峻阜、何能為培塿乎。夫帝王豈有常哉、大禹出於西戎、文王生於東夷、顧惟德所授耳。

劉淵は「帝王となるのに（漢族だけという）常であることがあろうか、漢族が聖人と崇め伝説の夏王朝の創始者である禹は西戎の出身、同じく聖人とされる周王朝の創始者である文王も東夷の出身ではないか。帝王になるにはただ授けられた徳によるのみである」と言い、自身の皇帝即位を正当化し、東晋だけが皇帝たりえるわけではないと暗喩している。『晋書』載記の高瞻伝にある慕容廆の言葉にも同様の表現がある。

廆敬其姿器、數臨候之、撫其心曰；「君之疾在此、不在餘也。今天子播越、四海分崩、蒼生紛擾、莫知所係、孤思與諸君匡復帝室。翦鯨豕于二京、迎天子於吳會、廊清八表、俾勳古烈、此孤之心也、孤之願也。君中州大族、冠冕之餘、宜痛心疾首、枕戈待旦、奈何以華夷之異、有懷介然。且大禹出干西羌、文王生干東夷、但問志略何如耳、豈以殊俗不可降心乎！」瞻仍辭疾篤、廆深不平之。

慕容廆は東晋成立に際して推戴の上奏文に名を連ねていることから、仕官を拒む高瞻を説得するために用いたと考えられる。姚弋仲や劉琨らの考えとは異なり、漢人でもなくても帝王になることができること（つまり皇帝は東晋、つまり漢族だけのものではない）と、華夷の別なく仕官すべき（東晋だけが政権ではない）ことを示している。漢族以外の勢力の認識は、従来の考えに従う者と新たな考えをもって行動している者の二通りの姿勢があったとわかる。前者はあくまでも自分たちは漢族に劣るという認識が存在し、後者には自分たちの力で新たな秩序を構築しようと、また自分たちと漢族が同等であるという認識が存在すると考えられる。

おわりに

今回は東晋元帝の勸進の新研究と題して東晋の成立過程を見てきたわけであるが、従来の亡命政権という見方は正確でないように思える。確かに中央の混乱を避けて江

南に勢力基盤を求めたのであるが、それはあくまでも軍事権を有した赴任であって、この地方の軍事権を中央政府が当てにしていたことが考えられる。四川はすでに李雄が抑え、荊州はど民や宗教指導者によって騒乱状態であり、多少の被害はあったものの騒乱を鎮定し安定していた区域であったことは明らかである。元帝と側近は少数集団で来訪したと考えられるが、ここを基盤として在地豪族・名族を取り込んで軍事的地位と政治的地位を確立した。しかし基盤を固める前に西晋が衰亡、北人南人の調和を図らねばならないなどの内憂を抱え、結果として江南から北進できず勢力を増す異民族勢力の南下を阻止するので手一杯となったと考えるのが自然である。度重なる勸進に中々承諾をしなかったのは、いつかは平陽に連行された皇帝を救い、中原を回復する心づもりがあったからではないかと思う。輔弼の臣として、琅邪王という宗室の一人として活動することが、彼の願いであったのだろう。しかし同時に国家を憂う家臣の信を失うわけにもいかず、国家の安定と人心の安寧を図るために、勸進に応じたと考えられる。

註

- (1) 全体を通して使用した、岡崎文夫氏『魏晋南北朝通史 内編』（一九八九、平凡社東洋文庫）、川勝義雄氏『魏晋南北朝』（二〇〇三、講談社学術文庫）、越智重明氏「東晋成立に至る過程に就いて」（『東洋学報』、一九五四）、矢野主税氏「東晋初頭政権の性格の一考察」（『長崎大学学芸学部社会科学論叢』、一九六五）、金民壽氏「東晋政権の成立過程——司馬睿（元帝の府僚を中心として——）」（『東洋史研究』、一九八九）、李濟滄氏「東晋貴族政治の本質——王導の「清静」政治を中心として——」（二〇〇四、『東洋史苑』）
- (2) 川勝氏前掲本、宮崎市定氏『九品官人法の研究』（一九九七、中公文庫）
- (3) 三田辰彦「西晋後期の皇位継承問題」（二〇〇八、『東洋学』）で琅邪王は皇位継承では権勢のない王位であるとす。
- (4) 岡崎氏前掲本、川勝氏前掲本、川本芳明氏『中国の歴史5 中華の崩壊と拡大 魏晋南北朝』（二〇〇五、講談社）